

小泉八雲とセツ 新婚旅行で発見した町 ことうら



ともにすごした13年8ヶ月、一番しあわせだったとき。

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は地球を半周、片道キップの旅をへて日本にやって来ました。アメリカ時代前半までの彼の人生は不幸の連続でした。辛く困難な経験から深い洞察力と、ニューオーリンズ・マルティニーク（クレオール文化圏）での生活体験もくわわり、「何ごとにも偏見なく、五感を研ぎ澄まして、本質を認識し正當に評価する。また小さなものや弱いものに共感し、慈しみのまなざしで寄り添おうとしました。」それは自分自身を投影した姿でもあったのです。これらの経験を文筆活動に昇華させていきました。

妻セツも明治維新で環境が激変、没落した武家の娘で多くの苦勞、困難な環境にあり、二人は同じような境遇に共感しあい結婚しました。1891年（明治24年8月）八雲40歳妻セツ23歳、伯耆・因幡の旅、人力車での新婚旅行です。琴浦町で随筆や書簡にででくる地域、赤碕花見潟墓地・八橋・逢束です。八雲は1904年（明治37年）54歳、東京でなくなります。帝国大学講師など、著書『知られぬ日本の面影』『怪談』『日本一ひとつの解明』など。八雲の作品には妻セツと二人三脚で作り上げた作品が多くあります。



琴浦町で過ごした、小泉八雲とセツのことば。

林立する広大な石の群れを抜けるまで人力車が全速力で駆けつけたが、まるまる15分もかかった。古いそれらの墓は家が絶えたか、子孫が家を去り、名前さえ忘れ去られたものだ。故人を呼び返してくれる人もいなければ、懐かしんでくれる地元の人もないーそんな影の薄い、遠い過去の人たちの墓である。（花見潟墓地）

私は八橋 Yabase を発見しました。八橋はきわめて静かな、美しい小さな町です。立派な旅館が1軒ありーそれに素晴らしい浜辺です。私が海に泳ぎに行きますと、いつでも町中の人々が総出で浜辺まで見物にきます。

（バジル・ホール・チェンバレン教授宛書簡）

ようやく盆踊りを見つけてまいりますと、反対に西洋人が来たというので、踊りそこのけにして、いたずらに砂をかける者がある。後から謝罪に来るといような珍事もございました。（セツ「思い出の記」）

